

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

# 情報発信

～完成を報告する日まで～

本誌「水とともに」は、水資源機構全体の広報誌としてすでに50年以上の間、情報発信を行っているが、全国の各事務所でもそれぞれに工夫を凝らした広報紙を作成し、地域の方々への情報発信を行っている。

今回は、10年以上にわたり月1回の発行を続けている広報紙「川上ダム通信」の梅村デスクに話を聞いた。

## 社内報から広報紙へ

三重県伊賀市で事業が進む川上ダム建設事業は、洪水調節や流水の正常な機能の維持の他、地元伊賀市で使われる水道水の確保も担う。いわゆる「ダム検証」が昨年終了し、平成34年度の完成に向けて事業を進めているところだ。そんな川上ダムのことを地域の方々に知っていただこうと発行している「川上ダム通信」は、今から10年前の平成17年5月に創刊しているが、元々広報紙として生まれたわけではなかった。「創刊当初は社内報としての位置付けで、社内や近隣の関係機関にのみ配布していたようです。創刊から1年ほどして、地域の方々との絆作りの一助になればと配布先を拡げていきました。」と梅村。さらに、「現在では、ダム建設予定地の近隣だけでなく、伊賀市内の各市民センターにもお届けしています。お届けした川上ダム通信は、各戸に回覧もしていただいています。」この取り組みは、「地域との架け橋“川上ダム通信”」として、地元のケーブルテレビでも取り上げられた。

## Profile

川上ダム建設所 総務課 課長

**梅村 喜重** *Yoshishige Umemura*

昭和57年4月、水資源開発公団（現水資源機構）に入社。最初の配属先である筑後大堰建設所をはじめ、全国各地の事業所で財務や総務業務を担当。前任地の愛知用水総合管理所では、総務課長として関係機関と連携し愛知用水通水50周年の各種イベントや情報発信を行う。平成25年4月より現職。



川上ダムの位置

## 身近な川上ダムを目指して

地域の方々に川上ダムのことを知っていただこうと発行を続ける川上ダム通信。毎月の発行にあたり、

心がけていることを聞いてみた。「事務所が行っている取り組みや事業の進捗状況はもちろんですが、地域のイベント情報や意外と知らない地元の名所、地域の歴史などの情報も取り上げ、川上ダムを身近に感じていただけるように心がけています。また、専門用語を使わないようにするとか写真の配置を工夫するなど、見やすい紙面作りにも気をつけています。」一方で、「本来であれば事業の進捗状況を大々的にお伝えしたいところですが、近年はなかなか事業が進まない状況がありました。今後は、事業の進捗状況を今まで以上にお伝えしていきたいと思います」との意気込みも。

広報紙の発行以外にも、地域の行事やイベントに積極的に参加し川上ダムのPRを行うなど、身近な川上ダムを目指して、地域の方々への情報発信を続けている。



## 完成まで続けます！

ところで、川上ダム通信の発行はどの様に行われているのだろうか？梅村に聞いてみた。「全て職員の手作りです。毎月、編集長の所長を筆頭に編集会議を行い、紙面の構成を決めていきます。また、毎月の発行担当職員を当番制で決めており、担当職員を中心に全職員が交代で記事を書きます。紙面の作成に全職員が携わることで、職員の広報に対する意識が高まっていると思います。」事務所一丸となって、毎月の発行を支えている。

最後に、今後の目標を聞いてみた。「平成17年の創刊以来、川上ダム建設所に勤務した職員がこつこつと継続して発行してきたことで、地元伊賀市の市長さんや職員の皆さん、地域の皆さんからも温かい言葉を頂



いているところです。今後も継続して発行していくことが、地域の皆さんの声に応えることになると思います。ダム完成を報告する記事が書ける日まで、発行を続けていきたいと思います。」

社内報として創刊した川上ダム通信は広報紙に生まれ変わり、10年の時を経て120回を超える発行を続けてきた。平成34年度のダム完成まで毎月欠かさず川上ダム通信のバトンを引継がれれば、創刊200号を超える頃にはダム完成の報告をしていることだろう。



※「川上ダム通信」は、川上ダムのホームページでもご覧頂けます。

<http://www.water.go.jp/kansai/kawakami/index.htm>

第4代デスクの梅村は、総務課長として事務所のまとめ役を担う。職員の体調などにも気を配り、努めて話しかけるように心がけているというが、やはり一番楽しいのは家族と過ごす時間だと、笑顔で話してくれた。

